

第5回仙台城跡調査・整備委員会

- I. 開催日時 令和3年3月18日(木)10時00分～12時00分
- II. 開催場所 市役所上杉分庁舎12階第1会議室
- III. 出席者 (委員) 藤澤 敦・北野 博司・籠橋 俊光・佐浦 みどり
深澤 百合子・渋谷セツコ
佐々木 貴弘(欠席)永井 康雄(欠席)奥村聡子(欠席)
(宮城県) 佐藤 憲幸(教育庁文化財課 技術補佐)
(事務局) 【教育局】
生涯学習部長 筒井 幸子
文化財課長 長島 栄一
仙台城史跡調査室長 鈴木 隆
主任 齋藤 俊義
主任 加藤 智仁
主事 須貝 慎吾
主事 佐藤 恒介
【建設局公園課】
公園整備担当課長 鈴木 江美子
【文化観光局観光課】
賑わい創出係長 三浦 貴之
(報道機関) (3社)
- IV. 傍聴人 0名

※会議録の署名について委員長は深澤委員を指名

1 開会

2 挨拶

- ・仙台市教育委員会生涯学習部長

3 新委員紹介

- ・渋谷セツコ委員による自己紹介

4 議事

【報告】

1. 令和2年度の調査成果について

【資料1】に基づき事務局より説明

(質疑応答)

(深澤委員) 三の丸土塁調査区では盤状に凝灰岩が検出しているが、登城路調査1区での検出は盤状ではなく、道路の舗装のように粉碎されて敷き詰められているのか。

(事務局) 登城路調査区では三の丸土塁調査区と比べ、人が歩くことを想定して細かい凝灰岩を叩き締めて薄く敷いている。

(深澤委員) 砂利のように敷き詰められているイメージか。

(事務局) 砂利ではなく、薄い凝灰岩を敷き詰めているイメージである。

(深澤委員) ここで敷かれている凝灰岩の産出地はどこか。また宮城県内に凝灰岩の採掘場はあるのか。

(事務局) 産出地は定かではないが、仙台城跡では掘削深度によっては広瀬川凝灰岩の層がみられる場所もある。

(副委員長) 資料P2のKS1155石垣の写真で見えている路面は、今回検出した第2路面と同じ層か。また、KS1155石垣の根元に並行して石列があるが、今回見つかった飛石状の石列と趣や石材は違く見えるものの、並行しているようにも見える。2つの石列の関係性をどう考えているのか。

(事務局) 令和元年度の調査で検出されたKS1155石垣の根石部は、今年度調査のIV層(近代の堆積土層)上面で構築されている。令和元年度調査においても根石の下層から、第1路面としている凝灰岩層を検出しているため、今回の調査の堆積状況とも一致する。また、今回検出した踏み石状のKS1180石列とKS1155石垣根石部の石列は、石材の

大きさが違いうことに加え、KS1180 石列は KS1155 石垣根石部の石列より下層で検出しているため別遺構と考えられる。

なお、KS1155 石垣は、今回の石列や近世期の登城路と向きを意識して積まれている可能性がある。今後、登城路の形状を明らかにするため、石垣を解体し背面を調査することも検討したいと考えている。

(副 委 員 長) 登城路と造酒屋敷の幕末期の正確な境界ラインはまだ明確にわかっていないということか。また、近代の KS1155 石垣を壊して調査するという事は審議が必要になる。今回の調査で登城路の第 2 路面下に暗渠排水が確認されていたが、第 1 路面の石組側溝を踏襲したのであれば、想定される登城路の中央部に近い位置に側溝があったということになる。

土塁の調査について資料の仙台城絵図のとおり三の丸土塁に漆喰塗の土塀があったのだとしたら、発掘調査で漆喰粒が混じる可能性があるが今回の調査ではどうか。

(事 務 局) 漆喰粒は検出していない。

(副 委 員 長) 瓦が葺かれる土塀は漆喰が残る可能性が高いため、来年度の調査では意識して調査すべきである。

次に資料 P5 第 27 図 3 区断面模式図の V 層内にぐり石が描かれており、場合によっては江戸期の石垣背面のぐり石である可能性があるがどうか。

(事 務 局) 盤状の凝灰岩を積んだ土塁の積み土 (VI 層) の上層で、近世の掘り込みに切られた状態でぐり石を含む V 層を確認している。この層は近代の遺物が含まれないことから近世と考えている。V 層は現在の積み直された石垣より高い標高で確認しているため、近世期は石垣天端が現在より高い位置だったと考えられる。

(副 委 員 長) V 層に土塁の積み土の IV 層が被る形になっているが、1・2 区で確認した 2 時期の盛土とどう対応するのか。

また場合によっては、石垣を一度壊して積み直していることにもなるし、鋸歯状の三角ぐりの末端が出ているだけの可能性もあるので気を付けて解釈しなくてはならない。

(事 務 局) 1・2 区の土層と 3 区の土層の状況は、距離が離れており対応する土層について明らかではない。今後の課題としたい。

(佐 浦 委 員) 私見では石がたくさん転がっているようにしか見えないが、塀があった痕跡と判断できるのは、専門的な知識をもって研究している成果だと感じた。石垣の石材が落下したことがわかる図解資料 (第 34 図) もおもしろい。昔の建物跡が遺っているように、

これからは今あるものも残っていくと思う。将来のことも考えるきっかけにもなった。

(事務局) 調査では検出した石列を土塀とするには確証がなかった。8月に行われた専門部会の現地検討と、土塀跡の類例調査等の検討を経て今回の解釈に至った。こうした調査の積み重ねで、仙台城跡の個性や特徴などをアピールしていきたいと考えている。

(渋谷委員) 三の丸土塁6次調査の調査区は3ヶ所だが、さらに多くの成果を得るためには調査箇所を増やす必要がある。将来的にその可能性はあるか。

(事務局) 土塁については来年度も発掘調査を実施する。また、将来的に調査成果から土塀を復元する場合には詳細な設計が必要となる。その設計の際には補足的に追加発掘調査を行うことも考えられる。

(籠橋委員) 登城路1区の第2路面を18世紀と断定した理由はあるのか。

(事務局) 資料P3第9図登城路1区断面模式図で示している、凝灰岩で舗装されている第2路面に伴って機能したKS-1179暗渠からは18世紀を示す大堀相馬の碗が出土している。また、第2路面が機能している間、経年により薄く堆積した層からは19世紀前半を示す大堀相馬の土瓶がまとまって出土している。そういった状況から第2路面の年代は18世紀と判断した。なお、第1路面の上面からは遺物は出土していないが、さらに下層のVIb層から掘り込んだ石組側溝からは17世紀初頭から前葉の唐津産皿が出土している。

(委員長) 本丸、二の丸、東丸を含めて、これまで凝灰岩を敷き詰めて形成した層はほとんど出ていない。凝灰岩を採取するためには、大規模な掘削や崖面の切り崩しを行う必要があると考える。登城路面でこれだけの凝灰岩が敷き詰められているということは、それに匹敵する大規模な土木工事が近く行われた可能性を示すので、それに留意して今後も検討を進めるべきである。

2. 整備基本計画の策定について

【資料2】に基づいて事務局より説明

(質疑応答)

(委員長) 今後、調査から保存・整備にいたる様々なことを本委員会で検討することとなっている。特に仙台城跡の整備事業は市民の関心が高く、責任を持って審議する必要がある。

資料2に記載のある調査、修景、整備、活用事業については、本委員会の設置要綱第1条に則り、本委員会で取り扱う内容となるのか。

(事務局) 基本的にはそうであるが、修景については本委員会に含まれていない植生の専門家の意見をもらう必要があり、今後検討する方針である。

(委員長) 修景については専門家の意見が非常に重要である。本委員会でも審議していきたい。整備については、活用事業まで進めることで初めて市民に活用してもらえる。今後の重要な議題となるので、委員には市民目線に立って意見をもらいたい。

(渋谷委員) 基本計画に基づいた今後の整備に期待している。活用事業に関して、復元したもの見たり、研究に使うだけではなく、公園センターとの連携も念頭に置いた市民が楽しみ長く使っていける公園的な活用が必要である。五色沼についてはフィギュアスケート等のスポーツとの関係を市民は期待しており、その期待に応える活用を計画に追加してほしい。

(事務局) 発掘調査と併せて検討する。公園センターとの連携については、公園課長から説明をいただきたい。

(建設局公園課長) 公園センターについては令和2年10月から建築を始めている。公園センターの中には青葉山区域の歴史や自然を展示する施設も設置する予定である。また、公園センターを拠点としたエリア散策などの活用プログラムの展開も検討しており、その中で五色沼や長沼についても文化財課と連携しながら活用を図る考えである。

(深澤委員) コンセプトにある「政宗ビュー」という言葉について、政宗が見た仙台城および城下と、現在の仙台城跡にはイメージの相違がある。政宗ビューの問題を解決するには発掘調査成果に基づいた初期の城郭構造を復元する整備が必要である。

(委員長) 渋谷委員の意見のとおり、公園課や観光課などの関係部署との連携は今後大事になる。

(佐浦委員) 資料2のようにコンセプトが謳われると、それに関するモノづくりや交流が広がっていく。復元することでシンボルができるだけでなく、仙台の魅力を再発見できる。

3. 福島県沖地震による被災状況について

【資料3】に基づいて事務局より説明

(質疑応答)

(副委員長) 被災箇所の対応について、本委員会で検討を進めるのか。中門石垣の①-1で応急措置として、既存の園路を塞ぐ形で大型土嚢を設置する対応は正しいのか疑問が残る。緊急ではあるが、部会で現地検討を行ったうえで方法を定めることもできたのではないか。

①-2 中門南側石垣は天端石 3 石がずれたが、多数の間詰石の落下も大きな被害として対応を考える必要がある。また、⑥の崖面の地割れは前回の地震でも発生しており、今後も地震のたびに崖際が失われる可能性があるため措置を検討する必要がある。崩落を抑える方法もあるが、予め発掘調査を行い記録する方法も考えられる。

今回の地震被害をみると、石垣の天端が動く特徴がみられるため、特徴を考慮した対策を検討する必要がある。①-1・2 は、天端石の動きだけなら石垣の裏側から引っ張る対応も検討してほしい。

(事務局) 大型土嚢の設置については、被災石垣に面する市道を車両が通行しており、道路管理者や警察から安全性を十分に確保するようにと指導があったため緊急で設置する方針である。今後の修復方法については、本委員会で見解をもらいたいと考えている。また、崖面については被害状況を把握でき次第、復旧の範囲や方法について検討したい。

(副委員長) 大型土嚢については緊急対応ということであれば了解である。

4. 令和 3 年度の事業予定について

【資料 4・2】に基づいて事務局より説明

(質疑応答)

(渋谷委員) 造酒屋敷跡について今後調査等の予定はあるか。

(事務局) 造酒屋敷については、既に調査を実施しており、総括を昨年度報告している。今後は、成果に基づき造酒屋敷の建物等の整備を進める方針である。早期の整備として、造酒屋敷の説明看板の更新等を予定している。

(副委員長) 造酒屋敷について、聞き漏らしたことがあったため確認したい。資料 1 の P2 で造酒屋敷の発掘調査で石組み側溝を検出しており、今回検出された第 1 路面の石組側溝と直線的に繋がる位置関係である。石材や時期等について所見がほしい。

(事務局) 造酒屋敷発掘調査の際に確認した石組側溝は、無加工の円礫を用いた石組側溝であったが、今回確認した石組側溝は自然石と加工石材で構成されている。層位的な関係性については来年度の登城路調査で確認できると想定している。

5. その他

- ・事務局より今後の予定について説明
- ・宮城県よりコメント

6 閉会